

セメント質様硬組織の著明な増生をみた 複雑性歯牙腫の一例

板垣 光信 武田 泰典 鈴木 鍾美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

(主任: 鈴木鍾美教授)

[受付: 1988年5月27日]

抄録: 43歳女性の右側上顎に生じた複雑性歯牙腫の一症例を報告した。歯牙腫は2歯よりなる融合歯様の部分と不規則な硬組織の増生巣とからなり、前者と後者は徐々に移行していた。不規則な増生硬組織のほとんどはセメント質様硬組織で占められ、ところどころに細管象牙質が散見された。

Key words: complex odontoma, cementum, odontogenic tumor.

はじめに

歯牙腫は歯原性腫瘍のなかでも発生頻度が高いものの一つであるが、その多くは一種の发育奇形に相当するものであり、真の腫瘍とはみなし難い¹⁾。歯牙腫は組織学的に、上皮系由来のエナメル質、間葉系由来の象牙質、セメント質ならびに軟組織から形成されるが、なかでも象牙質とエナメル質の増生が主体をなしている。

筆者らは、セメント質様硬組織の著明な増生をみたきわめてまれな複雑性歯牙腫の一例を経験したので、その組織所見について報告する。

症 例

患者は43歳の女性で、1か月前に後鼻漏を主訴として耳鼻科開業医を受診。慢性副鼻腔炎の診断にて消炎療法を受け、鼻症状は軽快した。しかし、その後、右頬部ならびに右上顎大臼歯部の不快感が出現したため、歯科的疾患が疑われ、板垣歯科医院に紹介来院した。

口腔外所見では、右側頬部に軽度のびまん性

腫脹がみられ、同部の皮膚は軽度の発赤を呈していた。

口腔内所見では、上顎の歯牙は345のみが残存しており、歯牙欠損部には可撤性義歯が装着されていた。右側上顎第二大臼歯相当部の歯肉頬移行部近くの義歯床縁に一致する部分に、小さな瘻孔が形成されており、同時に排膿がみられた。この瘻孔よりゾンデで触診すると、尖端に比較的滑沢な硬固物が触知された。また、歯槽部から頬骨下縁にかけて骨はびまん性に膨隆していた。

レントゲン所見では、右側上顎臼歯部に、拇指頭大で、境界明瞭な塊状の硬組織様不透過巣がみられた。この不透過巣によって上顎洞底は挙上されていたが、上顎洞と不透過巣との間には菲薄な骨様不透過層が介在していた。また、歯肉側では不透過巣に接する部分の骨は消失していた。

以上の所見より、歯牙腫ないしはセメント質腫に炎症を伴ったものとの臨床診断がなされた。消炎療法後、局所麻酔下にて摘出術を行った。

A case of complex odontoma with marked proliferation of cementum-like hard tissue.

Mitunobu ITAGAKI, Yasunori TAKEDA and Atsumi SUZUKI.

(Department of Oral Pathology, School of Dentistry, Iwate Medical University, Morioka 020)

岩手県盛岡市内丸19-1 (〒020)

Dent. J. Iwate Med. Univ. 13: 180-183, 1988

歯槽部粘膜を切開剥離すると、骨様ないしは歯牙様硬を呈する卵円状の腫瘤がみられた (Fig. 1)。腫瘤と周囲組織との癒着はなく、摘出は容易であった。

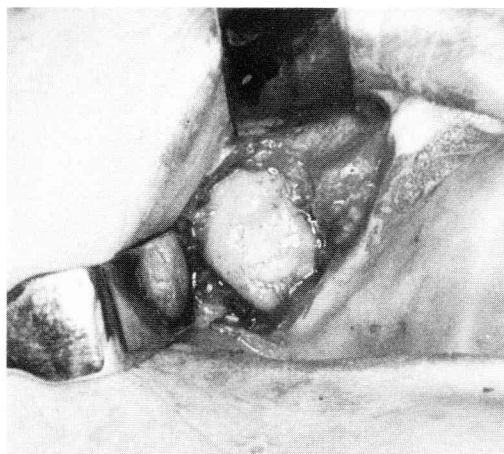


Fig.1 Surgical-operative view of hard tissue mass under the mucosa, found in the upper right molar region.

摘出物は $30 \times 20 \times 20$ mmの大きさの灰黄色を呈する硬組織塊で、全体的に表面はやや粗造であったが、一部にはエナメル質様を呈する滑沢な部分がみられた (Fig.2)。

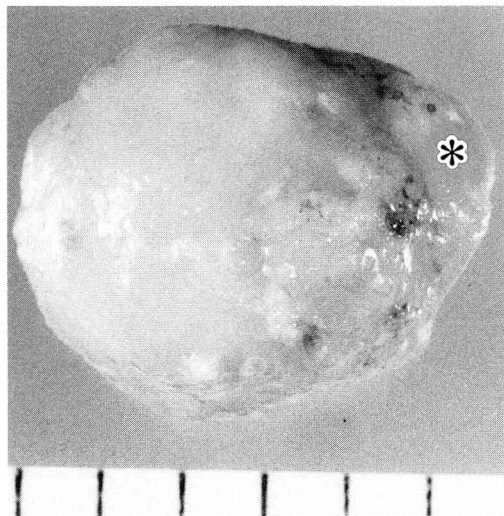


Fig.2 Macroscopic view of the resected hard tissue mass, showing rough surface. Enamel-like smooth surface is seen in part.

組織学的に、摘出物は2歯よりなる融合歯に類する所見を呈する部分と、不規則な構築を呈する硬組織塊からなっており、後者は前者の歯根から徐々に移行していた (Figs.3A,B)。不規則な構築を呈する硬組織の多くは細胞性セメント質に類する所見を呈しており、多くの改造線もみられた (Fig.3C)。さらに、不規則な細管構造を呈する象牙質もところどころに混在していた (Fig.3D)。なお、軟組織のすべては壊死に陥っていた。

以上の組織所見から、セメント質様硬組織の著明な増生をきたした複雑性歯牙腫との病理診断がなされた。

考 察

歯牙腫は歯源性腫瘍のなかでも発生頻度の高いものの一つであり、古くから諸家によって種々の分類が試みられてきたが、最近では、増生した歯牙硬組織の組織配列によって集合性歯牙腫と複雑性歯牙腫とに分類される傾向にある²⁾。歯牙腫の組織発生には、正常歯胚あるいは過剰歯胚が関連していることは、歯牙腫の生じた部位の歯の欠如や埋伏を伴う頻度が多いことから容易に想像される³⁾。また、1個の歯胚のみならず、2個以上の歯胚が関連している場合もあると考えられる¹⁾。今回報告した症例においても、2歯よりなる融合歯様の構造がみられ、その歯根から連続してセメント質様硬組織ならびに細管象牙質の増生がみられた。なお、今回の症例のように、歯根に連続してみられた歯牙腫を付着性歯牙腫 (anhängendes Odontom) と呼ぶ場合もある¹⁾。

一般に複雑性歯牙腫を構成する硬組織は種々の成熟過程を示すエナメル質と象牙質とが主体をなしており、一部にセメント質や不定形の石灰化物が混在しており、さらに、硬組織の形成が進行中のものでは硬組織の間に歯源性上皮を含む軟組織が認められる^{1,2)}。今回報告した症例のように、増生硬組織のほとんどが、細管象牙質を混じたセメント質様硬組織であり、さらに部分的に融合歯様の構造がみられた症例につ

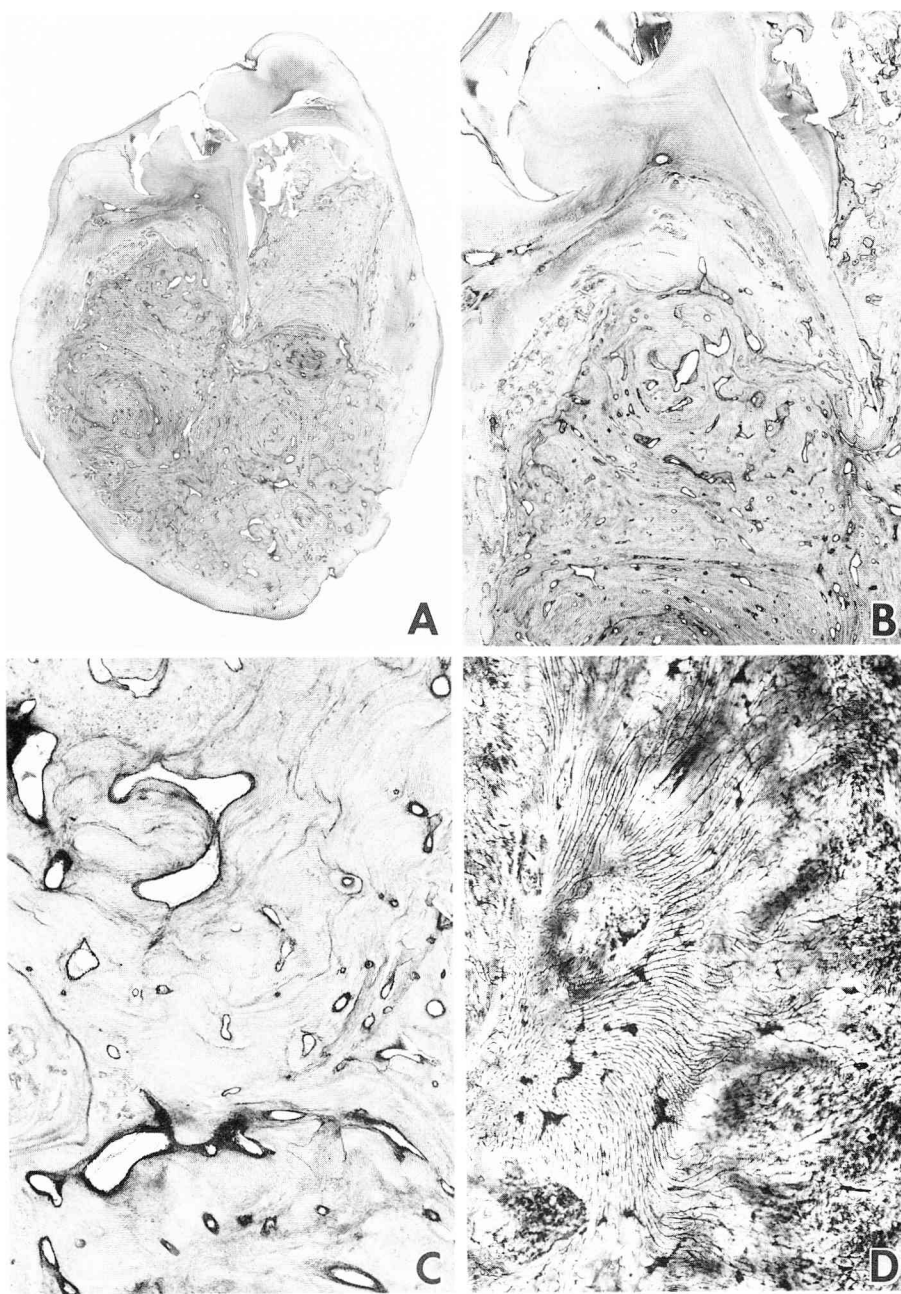


Fig.3 Histopathological view of the hard tissue mass. Entire view of the specimen shows the hard tissue mass is composed of fused teeth-like tissue and irregularly proliferated cementum-like tissue (A, HE stain). Roots of fused teeth-like tissue are gradually transformed into cementum-like tissue (B, HE stain). High magnification of cementum-like tissue (C, HE stain). Dentin with irregularly arranged tubuli is admixed with cementum-like hard tissue (D, Schmorl's thionin-picric acid stain).

いての文献的記載は筆者らの知る限りではみられない。

ま と め

右側上顎に生じた複雑性歯牙腫の一症例を報

告した。歯牙腫は2歯よりなる融合歯様の部分と不規則な硬組織の増生巣とからなり、前者と後者は徐々に移行していた。不規則な増生硬組織のほとんどはセメント質様硬組織で占められ、ところどころに細管象牙質が散見された。

Abstract : A case of complex odontoma with an interesting histopathological finding is reported. The patient was a 43-year-old woman. An x-ray examination revealed a hard tissue mass the size of pieon's egg, in her right upper molar region. Histopathologically, the resected hard tissue mass was composed of fused tooth-like tissue and irregularly proliferated cementum-like tissue. Dentin foci with irregularly arranged tubuli were scattered in cementum-like tissue.

文 献

- 1) 石川梧朗 : 口腔病理学Ⅱ, 改訂版, 永末書店, 京都, 507-512頁, 1982.
- 2) Pindborg, J. J. and Kramer, I. R. H. : International classification of tumours No. 5.

Histological typing of odontogenic tumours, jaw cysts, and allied lesions. WHO, Geneva, 1971.

- 3) 塚野多四郎 : オドントーム (硬性歯牙腫) の60例に関する臨床的研究. 其の1. 其の2. 大日本歯科医学会会誌. 35 : 39-72, 192-231, 1937.